

埼玉古墳群においては、昭和 42 年よりさきたま風土記の丘整備事業とともに、本格的な発掘調査が開始された。奥の山古墳についても昭和 43 年度からの周堀復元工事に先立ち、昭和 43 年 3 月に周堀の範囲確認調査が行われている（図 2）。調査では 3 本のトレンチが設定され、その発掘成果を基に、奥の山古墳は一重の周堀（水堀）として復元整備されている。設定されたトレンチは当時の畑の区画や農道に規制され墳丘の主軸と直行しておらず、また外堀の残存状況も良好ではなかったため、外堀の検出に至らなかったと考えられる。3 トレンチとも幅 1m と、遺存状況によっては遺構の確認は困難であったであろう。2 トレンチについては外堀の範囲まで達していない。この時の整備では周堀の形態を盾形のように復元しているが、発掘成果からの解釈ではなくむしろ園路計画を優先させた設計であった可能性が指摘されている（埼玉県教育委員会 2014）。実際に昭和 43 年度の工事により、中堤が園路として使用されている。図 3 は奥の山古墳の調査・整備の変遷をまとめたものであるが、昭和 43 年度の整備工事の際に、周堀の他に造出しの形状等も大きく改変された点がわかる。

以降 40 年近く、奥の山古墳において発掘調査は実施されなかった。その間一重の堀には水が湛えられた状態であったため、水位の変動等の影響を受け墳丘の崩落が懸念されていた。このような状況から、奥の山古墳の整備が行われることになり、平成 19～21 年度の 3 年にわたり、発掘調査が実施された。発掘調査の結果、外堀について、二重の堀をもつ点、形状は盾形ではなく方形である点が新たに確認された。墳丘の東側を中心に設定されたトレンチからは、部分的に確認されなかった箇所があるものの外堀のプランが検出された。北東隅角、南東隅角部については想定される箇所にトレンチが設定されたものの、外堀が検出されることはなかつ

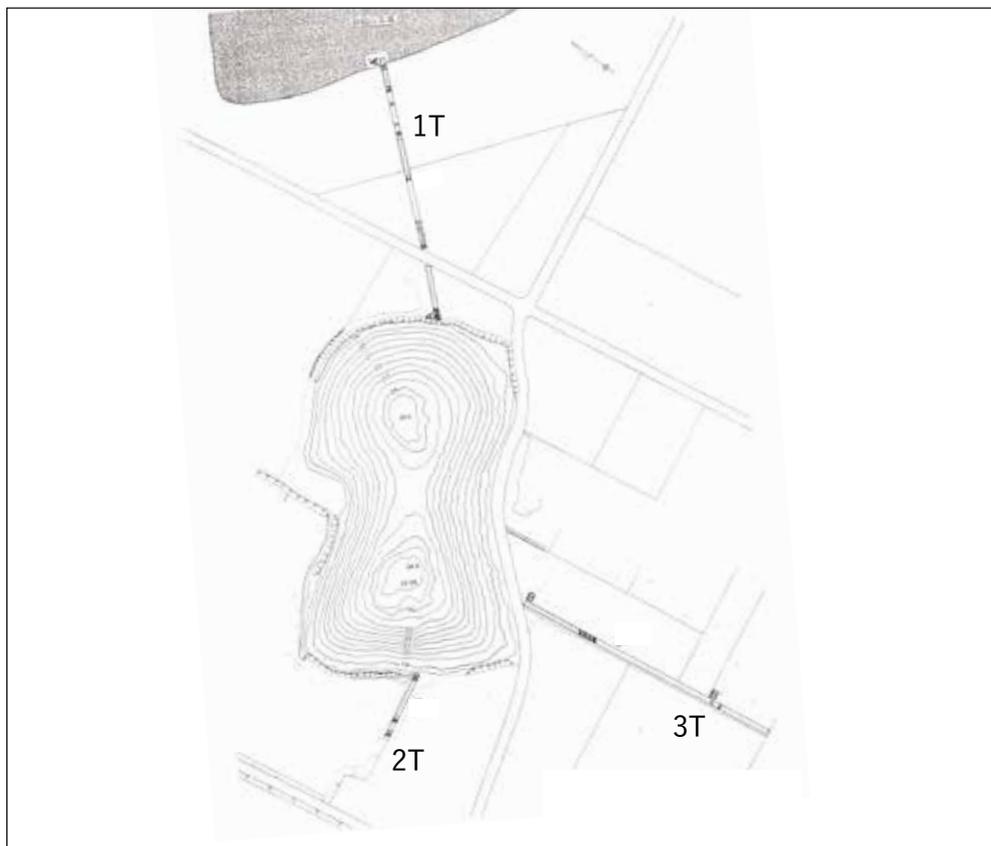
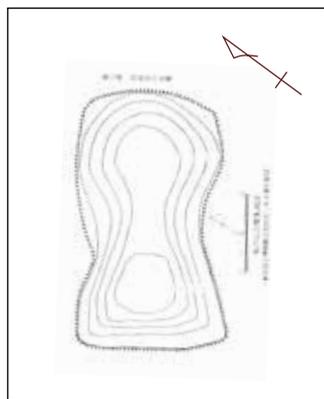


図 2 昭和 43 年度調査時の奥の山古墳トレンチ配置図



①昭和 10 年頃

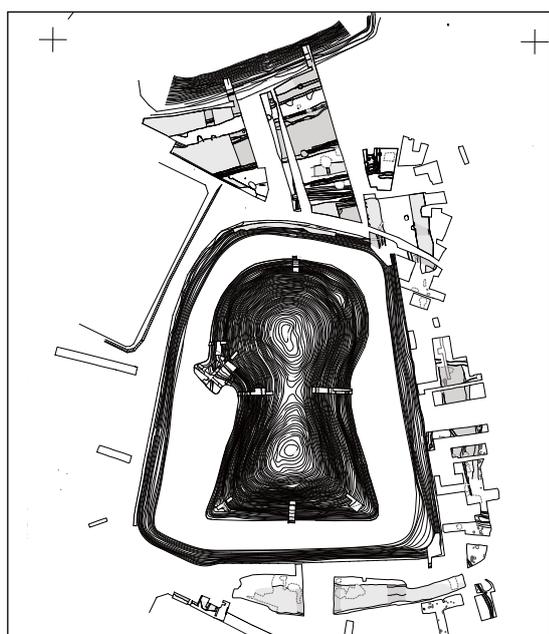
・スケールは 1/2000 であるが、①②は原図のスケールと合わないため微調整済。



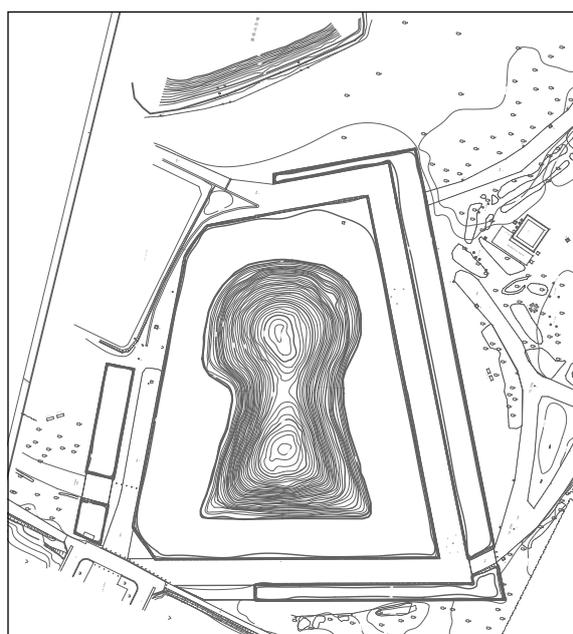
②昭和 43 年度調査



③昭和 43 年度工事



④平成 19 ~ 21 年度調査



⑤平成 21 ~ 23 年度工事

図3 奥の山古墳の発掘・整備による変遷図

た。外堀の幅は一定ではなく、場所によって数値に開きが見られる。前方部前面側に設定されたトレンチにおいては、トレンチの西端（8m）と東端（3m）で外堀の幅に 5m もの差があることが確認された。外堀の内縁は墳丘の主軸と直行するが、外縁は西側に向かって徐々に広がっていく様相を呈している。外堀の幅が一定ではない状況は、墳丘の東側でも看取できる。東側で検出された外堀の最大幅は 7.2m、最小幅は 3.6m とその差は 2 倍である。東側の外堀内縁は墳丘主軸と平行する。外堀の立ち上がりについては、内縁と比較すると外縁の勾配が緩く、一定ではない。奥の山古墳の外堀の外縁はプランとして捉えることが困難であり、場所によって幅や形状が変化していた様相が推測される。

墳丘の西側については、外堀を検出するために 3 本のトレンチが設定された。設定されたトレンチは昭和 43 年度工事以前は水田として使用されており、周りと比較して低くなっていたことがわかっている。公園整備の際に造成土によって盛土されたと考えられる。いずれのトレンチでも外堀は検出されず、墳丘の西側の外堀の残存状況は良好ではないと考えられる。

平成 19 年以降の調査成果を基に、内堀と外堀を中心に復元整備工事が実施された。平成 21 ～ 24 年に行われた復元整備では、内堀、外堀ともに墳丘を全周する形が採用された。周堀は水をもたない空堀とし、約 30cm の地形の凹凸という形が採用された。墳丘東側、南側の堀のラインは発掘成果を基に設定し、両者が交差する点を堀の隅角とした。西側については発掘において外堀が検出されなかったため、東側の復元プランを墳丘主軸を対象に折り返す形で復元されている。発掘面積が狭く、遺構の残存状況も悪かったために推定の形で復元されているため、実際の外堀の位置や形状はなお不明である。未調査範囲で更なる調査が進み、外堀や中堤に付設されたブリッジ等が見つかった場合は再整備を検討する必要がある。

3. 平成 30 年度発掘調査成果

平成 30 年度、奥の山古墳の南側の範囲が史跡の範囲として追加指定を受けた。奥の山古墳の南西隅部は、平成 19 ～ 21 年度の整備工事で取り残されていたため、調査が計画された。調査の主目的は、南西隅角を中心に、外堀の位置と形状を把握することである。調査の主体はさきたま史跡の博物館で、史跡整備担当の 3 名（岡本・山田・中井）が担当であった。

発掘調査は平成 30 年 5 月 28 日から 6 月 8 日にわたって実施された。今回の調査対象地は二重周堀の外堀の南西隅角部付近にあたる。埼玉古墳群は台地の縁辺に築かれており、奥の山古墳の南側については、水田造成による土取り等による地形改変が多い。水田であった部分については攪乱等を受け、遺構は残っていなかった。水田の間には市道として畦道状になっている箇所が存在し、この部分については攪乱が少なかった。本調査においては、市道の下にあり比較的残存状況が良かった箇所が遺構として捉えられている（図 4）。

3-1. 検出された遺構について

市道に沿って 1 トレンチが設定され、隅角が想定される箇所に 2 トレンチ、3 トレンチが設定された。当初は南北に伸びる道路の下のみを発掘予定であったため南北方向に設定していたが、道路下の遺構の残存状況が比較的良好であったため、1 トレンチを東西方向に拡張している。結果的に 1 トレンチは T 字形を呈している。1 トレンチでは、上面が削平を受けている

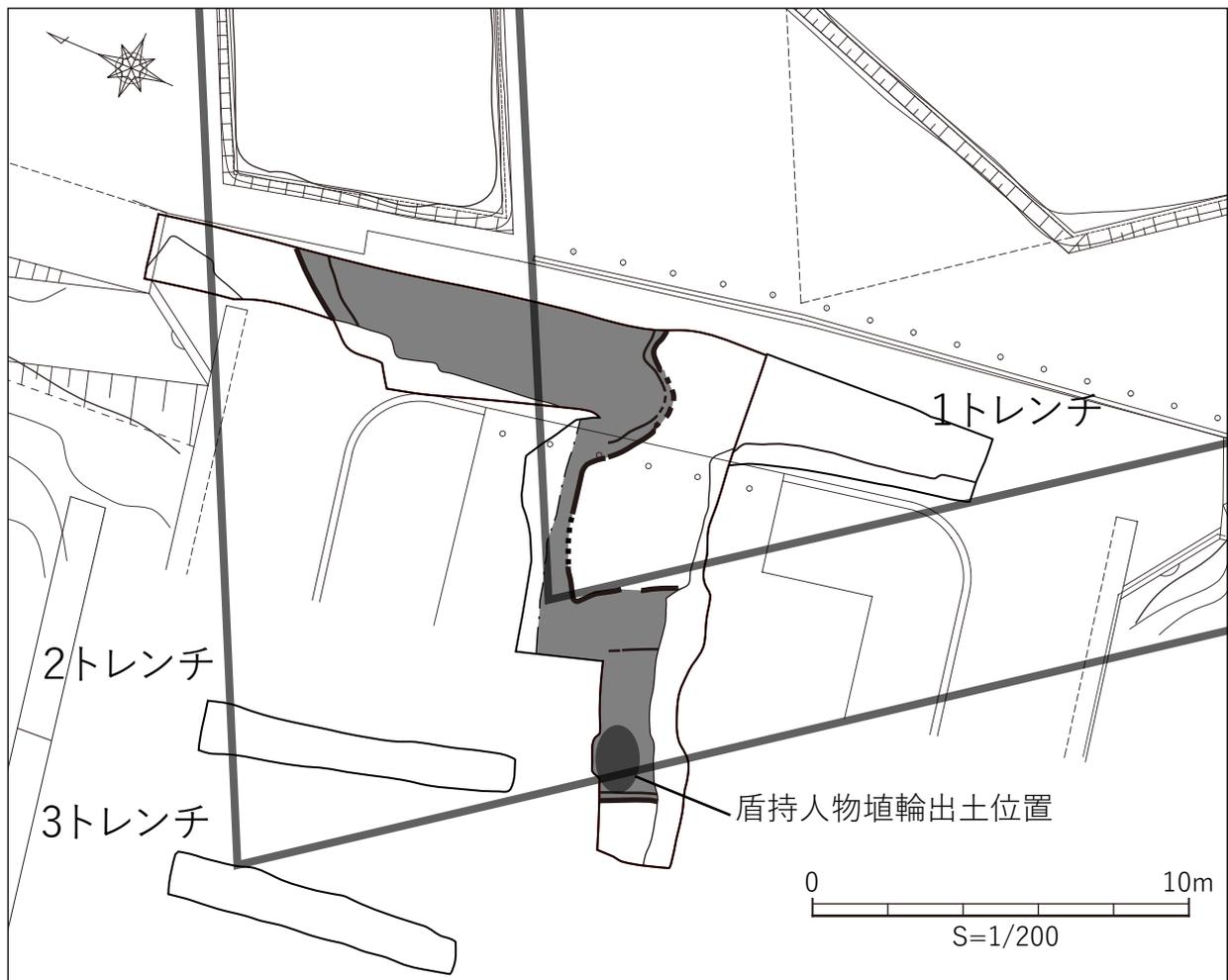
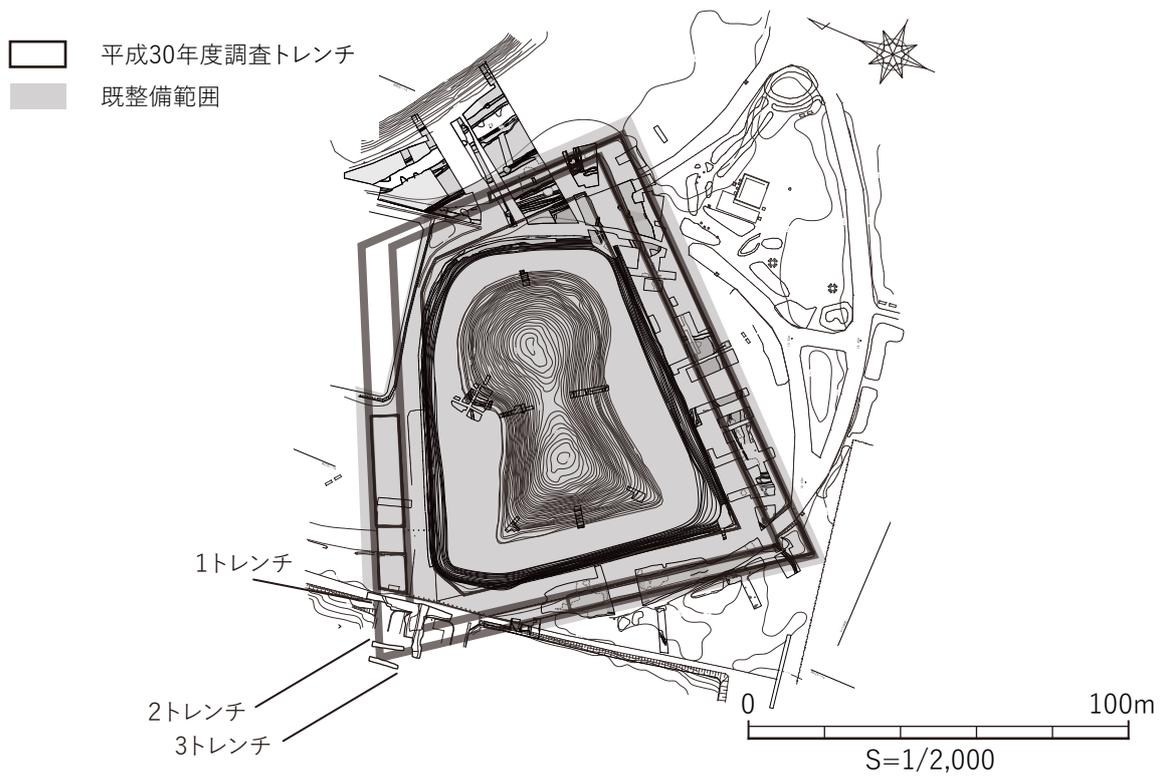
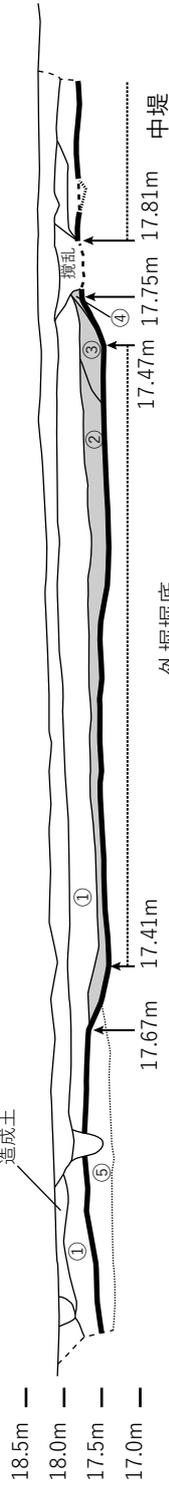


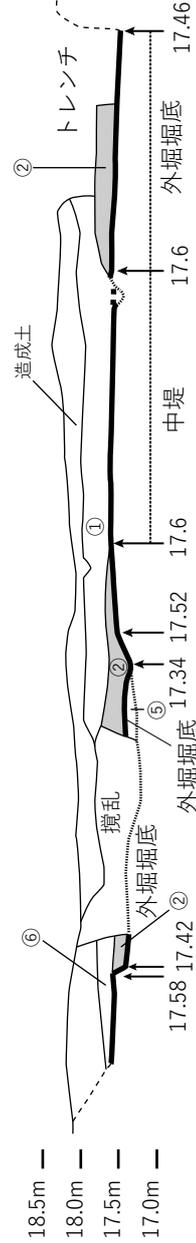
図4 奥の山古墳トレンチ配置図と平面図



30-1T 東壁	土層注記 (性格 色調 しまり 粘性 含有物)
①堆積土	茶褐色 (Hue10YR3/4) 非常に強 なし ローム粒多
②外堀覆土	黒褐色 (Hue10YR2/1) 強 弱 ロームブロック
③外堀覆土	黄褐色 (暗) (Hue10YR3/3) 強 やや弱 白色粒子
④外堀覆土	黄褐色 (明) (Hue10YR4/4) 強 やや強
⑤地山	黄褐色 (Hue10YR4/6) 強 弱 ローム粒子非常に多



奥の山古墳 30-1T 東壁セクション図 (1/100)



30-1T 北壁	土層注記 (性格 色調 しまり 粘性 含有物)
①堆積土	茶褐色 (Hue10YR3/3) 強 弱 ロームブロック少
②外堀覆土	黒褐色 (Hue10YR2/1) 非常に強 弱 白色粒子
⑤地山	黄褐色 (Hue10YR5/6) 強 やや強 ロームブロック
⑥堆積土	黄褐色 (Hue10YR4/4) 強 やや弱 白色粒子

図5 奥の山古墳セクション図

奥の山古墳 30-1T 北壁セクション図 (1/100)

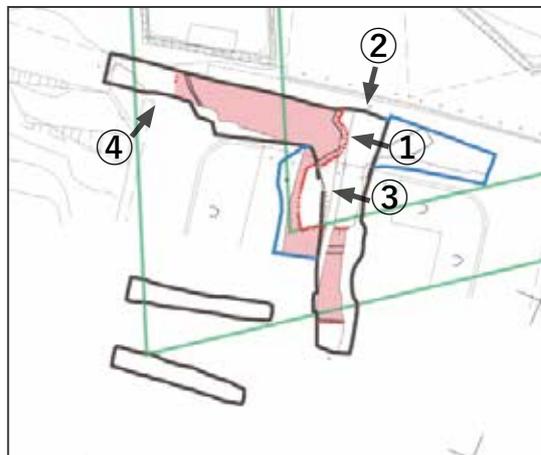


図6 奥の山古墳調査写真①

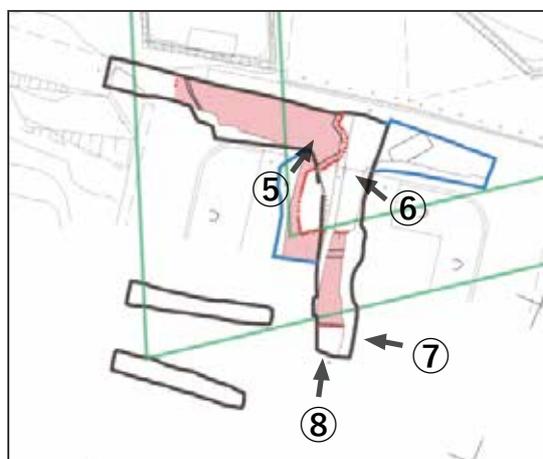


図7 奥の山古墳調査写真②

ものの、外堀の遺構を確認することができた。遺構確認面から堀底の最深部までは約 30cm と非常に浅い。旧表土からの深さは約 1.4 m である。過去の調査でも明らかになっているが、外堀の輪郭は直線的ではなく、不整形である。外堀の南西隅角部外側の立ち上がりについては、攪乱を受けており、範囲や形状等は不明である。外堀周囲の外堤については確認されなかった。一方 2 トレンチ、3 トレンチについては、水田に伴う耕作により遺構は検出されなかった。

1 トレンチのセクション図を図 5 に、遺構写真を図 6・7 に示した。写真①は、1 トレンチを東西に拡張する前の段階で、南から撮影したものである。写真手前側（南側）の黒褐色の土が外堀覆土であり、写真奥の黄褐色土は地山である。南北に設定されたトレンチから外堀覆土の堆積状況が良好に観察できたため、南側に延長し、更に西側に向かって直行するように拡張を行った。写真②は、1 トレンチ西側の拡張区を東側から撮影したものである。写真①で確認される外堀覆土の南側の立ち上がりが把握できる。外堀覆土の左側（南側）、黄褐色を呈す範囲が中堤である。写真の奥には、再び黒褐色土の堆積が見られるが、これも外堀覆土である。中堤の外縁南西隅は未検出の段階での写真であるが、中堤のプランは明瞭に検出している。中堤の角部分は矩形を呈しており、外堀覆土に向かって突出しているようにも見える（写真③：南から）。外堀外縁は緩やかに立ち上がり（写真④）、中堤側の内縁は比較的急に立ち上がっている（写真⑤・⑥）。この外堀の立ち上がりの緩急差が、奥の山古墳全体の外堀の形状を把握することを困難にしている。

東西拡張部の西側、外堀の外縁寄りからは、形象埴輪が多く出土した（写真⑦・⑧）。復元が可能であった盾持人埴輪は、顔を下にした状態でまとまって検出されており、樹立していた場所が遠く離れていなかったと想定可能である。

本調査で検出した外堀のプランに関して、南側は内外縁とも復元整備されていたラインの延長上に位置したが、外縁西側及び内縁南西部隅角北側のラインは復元整備されたラインと大きくずれるものとなった。発掘によって検出したラインが直線的でない原因としては、確認面が外堀の底面付近であり、堀底の高低差を反映している可能性を指摘できるが、古墳築造当時から不整形であった可能性も考えられる。発掘成果と既整備の外堀が合わないため、来跡者にとって混乱を来すことがないように配慮したうえで、発掘成果を整備に還元していく必要がある。

3-2. 出土遺物

本調査では、調査面積が狭小であったこともあり出土遺物は少ない。テン箱 2 箱分の遺物のほとんどが埴輪であるが、形象埴輪の比率が高い。特筆すべきは、外堀覆土内より出土した盾持人埴輪である。顔の上半分と円筒器台部の底部が欠損しているため全体の復元は困難であるが、盾の形状や細長い目など、非常に特徴的である。隣接して盾持人埴輪（奥 1）とは異なる個体の盾持人埴輪の破片が出土しているため、外堀の更に外側に複数個体の盾持人埴輪が並べられていた可能性が指摘できる。奥の山古墳の隅角、更には埼玉古墳群全体の南側を守護するかのようにならされていたのであろう。本報告内では、形象埴輪について奥 1～奥 4 については実測を実施した（図 8・9）。奥 1～奥 6 までの 6 個体については写真撮影を行い、資料化を試みた（図 10・11）。

奥 1 は全体を復元可能であった唯一の資料である（図 8・10）。頭部の半分から上及び円筒

部の下半部は欠損しているため、全体の高さは不明である。胴体部分に比べて顔が大きく作られる点、盾に線刻等の模様がない点、戈などの持ち物がない点、目が長方形で表現されている点などが特徴である。胎土には長石、石英、角閃石を多く含む他、海綿骨針が微量含まれる。色調は橙色（Hue5YR6/6）で焼成は良好である。

円筒部の側面に鱗状の盾面を、上部に頭部を取り付ける形状である。首から下は底部に向かうほど広がる円錐形を呈する。円筒部に突帯はなく、透孔も穿孔されない。盾部は円筒部の側面やや前よりに、粘土板を取り付けて作っている。粘土板はほぼ左右対称であり、線刻等の模様をもたず、赤彩もされない。盾部の下縁はほぼ水平で直線的であるが、上縁は外側が高く作出され、斜めになっている。盾部の側縁は反りをもち、上端から下端に向かって中央部が凹んだ弧を描く。側面は丁寧な面取りされている。盾部表面の上縁部と下縁部には幅約 5cm の隆帯が作出されている。盾部が取りつく円筒部にも隆帯が及んでいるが、この隆帯の範囲が盾部を示すようである。熊谷市・権現坂埴輪製作遺跡 1 号坑から出土した盾持人埴輪に類例を求められるが、こちらは下縁に隆帯は付されない。本庄市・前の山古墳の「笑う埴輪」の盾部の突帯等の例はあるが、奥 1 の隆帯は非常に幅広である。盾面に持ち物や文様が付されなかったため、盾であることを強調するために隆帯を付した可能性がある。調整は、盾部は表裏面ともにハケ調整される。盾の鱗部分はヨコハケで、側縁辺部付近に一部タテハケ、ナデ調整が見られる。鱗部裏面もヨコハケ調整である。一部に沈線が見られるが、文様を意図して施されたものではないと考えられる。円筒部は表裏面ともにタテハケ調整である。鱗部のヨコハケ調整が一部タテハケによって切られるため、調整の順序は鱗部から円筒部の順である。円筒部裏面のタテハケ調整は、円筒部に接続する頭部の後頭部にまで達している。隆帯はナデ調整されており、ハケ目を切ることから、ハケ目調整後に付されたものであると考えられる。円筒部内面はナデ調整される。

頭部は目から上が欠損しており頭頂部の表現は不明である。顔面は粘土板を付加して作り、切れ長の目と横に細長く開いた口、左右に径 2cm 程度の耳孔を穿孔する。鼻梁は高く作り、赤彩する。眉とつながる可能性が高い。完存ではないため明言できないが、憤怒や悲嘆、笑顔の表情は残存部から読み取れず、無表情である。

別個体の盾持人物埴輪の破片（奥 2：盾の部分のみ）も隣接して出土していることから、外堀の外側に古墳の隅を守るかのように、2 体以上並べられていた可能性がある。既往の奥の山古墳の調査では盾持人埴輪の出土は確認されていないことから、南東隅角部を選んで樹立された可能性がある。

なお図化に当たっては、SfM-MVS を用い三次元の点群情報として記録した。出力の際には点群にメッシュを貼り DEM 出力、GIS ソフト上で陰影処理をかけた後に 70% 透過させた orthophoto を重ね合わせた。復元のため石膏が入れられた箇所は、単調な白色であるためノイズが多く出るものの、全体の形状や調整については可視化できた。紙面の都合上、三次元データを取得したのは奥 1 の盾持人埴輪のみとなったが、破片資料についても三次元で記録する予定である。三次元モデル生成のための写真撮影の技術の向上及び復元部分のノイズを低減させるための工夫（着色等）が今後の課題である。

奥 2 は形象埴輪の一部と考えられる個体である。盾持人埴輪、または鞍形埴輪の鱗部の破片



图8 形象埴輪（奥1）（S=1/4）

であると考えられ、円筒部への接続部分から欠損している。接続部の観察から、粘土板として整形してから、円筒部に貼り付けていたという成形過程がわかる。粘土板の下部は奥1の盾持人埴輪の鰭部とは異なる形状であるため、た鞍形埴輪の破片である可能性も高い。破片資料であり線刻をもたない個体であるため、どちら側が盾の前面であったかは不明である。盾面には表裏ともヨコハケ、ナナメハケ調整され、縁辺部の一部にタテハケ調整される。部分的にナデ調整も観察される。縁辺部は丁寧にナデられる。

胎土には長石、石英、角閃石を含む。色調は橙色（Hue5YR6/6）で焼成は良好である。奥1の付近から出土し、別個体であるため、南西隅角部に2体以上の盾持人埴輪が並んでいた状

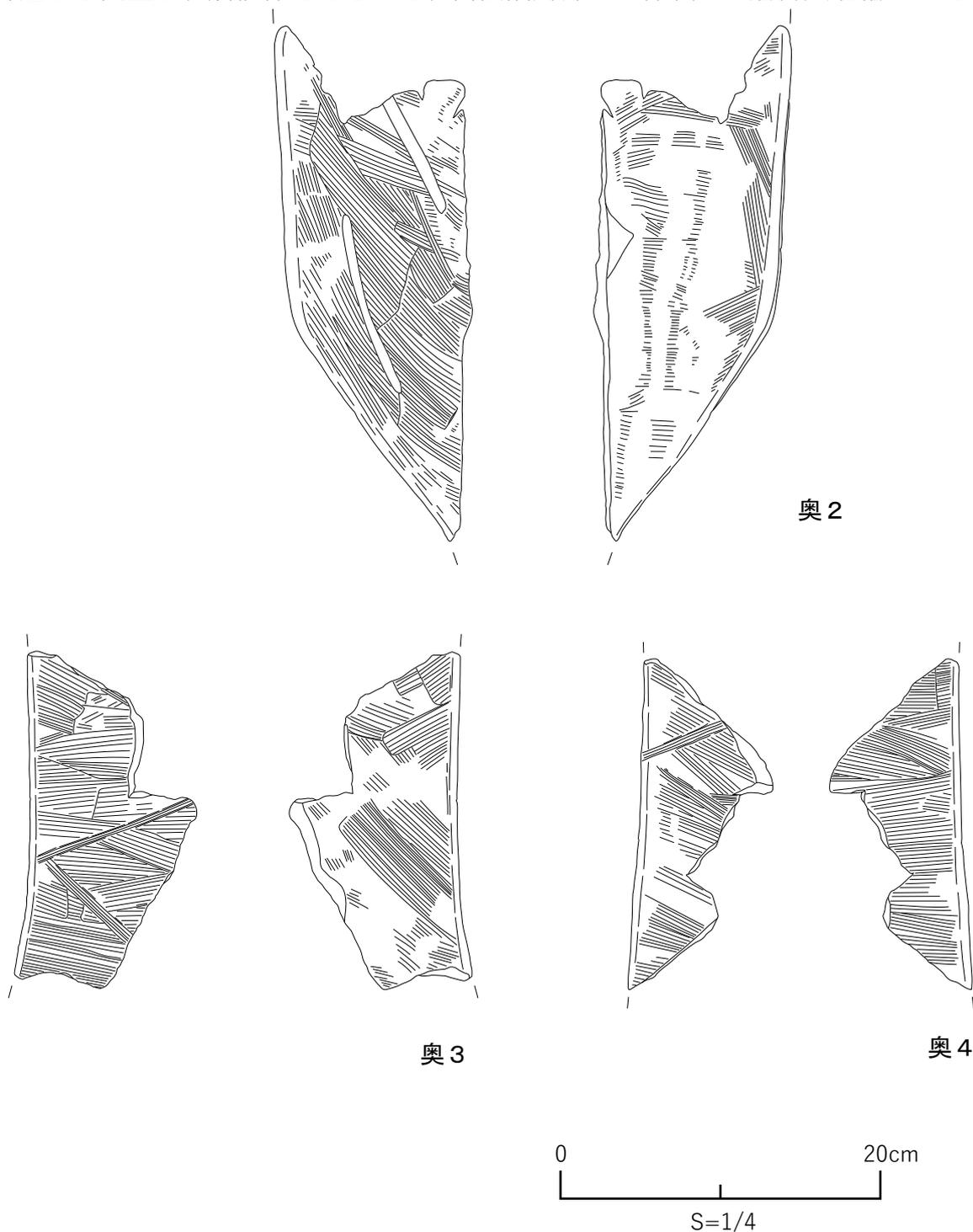


図9 形象埴輪実測図（奥2～4）（S=1/4）



图 10 形象埴輪写真（奥 1）



図 11 形象埴輪写真（奥2～6）

況が推察できるが、他の形象埴輪の樹立状況も考えられる。

奥3・奥4は盾持人埴輪破片である。胎土、色調、器壁の厚さ、調整が酷似しているため、両者は同一個体であると考えられる。盾持人の鱗部であるが、円筒部との接続状況は不明である。盾面の表裏面はヨコハケ・ナナメハケ調整され、表面には鋸歯状の線刻が施される。盾持人埴輪でない形象埴輪である可能性もある。やや外反する側縁部は丁寧にナデ調整される。胎土には長石、石英、角閃石、酸化鉄粒を含み、色調は明褐色（Hue7.5YR5/6）、焼成は良好である。

奥5も盾持人埴輪の破片である。円筒部と盾部の接続にあたる破片で、鱗部の器壁がやや薄いため鞍形埴輪の破片である可能性もある。円筒部の内面はヨコナデ調整、鱗部の表面はヨコナデ調整される。粘土板と円筒部は別個に作られ、取り付けられた後に別の粘土を使用しナデ付けられていた様相が観察できる。胎土には長石、石英、角閃石、酸化鉄粒のほか、雲母を微量に含む。色調は明褐色（Hue7.5YR5/6）であり、焼成は良好である。

奥6は形象埴輪片である。円筒状の粘土棒の先端が平たく押しつぶされ、楕円形を呈す。小破片であり全体の様相は不明であるが、人物埴輪の下げ美豆良の先端部分によく似た資料である。平成21年度の発掘調査では、墳丘造出し部から人物埴輪の顔や鬚部の破片、美豆良と考えられる破片が集中して出土している⁽¹⁾。本調査では他に人物埴輪は出土しなかった。出土位置を考慮すれば、盾持人埴輪の頭頂部に付された突起（笄帽）部分である可能性が高い。長石、石英、酸化鉄粒を胎土に含み、色調は明赤褐色（Hue5YR5/6）、焼成は良好である。

4. 盾持人埴輪について

埼玉古墳群においては、瓦塚古墳、將軍山古墳から完形の盾持人埴輪が出土している。また完形品ではないが、稲荷山古墳、天祥寺裏古墳からも盾持人埴輪と考えられる個体の出土例がある。ここでは、各古墳の盾持人埴輪を整理し、奥の山古墳の盾持人埴輪の樹立状況や欠損している頭部の形状について考えてみたい。

●稲荷山古墳出土盾持人埴輪

中堤造出しに近い外堀から盾をもつ半身像の埴輪が出土している。頭部と盾の下半分、円筒部を欠損している。円筒形の胴部にやや膨らみをもった頭部が付けられる。円筒部の両側面には円形透孔が穿孔される。盾部は一枚の粘土板ではなく、円筒部の両側面に粘土板を貼付して表現される。盾はやや湾曲し、表面はナメハケ・タテハケ調整後、一部ナデ調整によって消されている。盾部の上端部直下には、粘土紐が貼付される。長い首の上に頭部が乗り、顔面は粘土板を貼って作られるが、大部分が欠損しており表情は不明である。左目から左の頬にかけて、2条の沈線が施される（埼玉県教育委員会 1980）。

半身像の他に、顔面に線刻をもった人物埴輪の頭部が出土している（図 12 左）。出土位置は半身像と同じく中堤造出し付近の外堀である。肩部以下を欠損しているため胴部の形状は不明であるが、盾持人埴輪である可能性が指摘されている。頭には被り物をしており、正面中央に大きく U 字状の切り込みをもつ。耳は縦長で鼻は明瞭に作出される。左右の頬に 2 本 1 対の線刻が 2 組施され、入墨表現であると考えられる。頬に施された沈線が、同じく稲荷山古墳から出土した盾持人埴輪の半身像と共通している（埼玉県教育委員会 1980）。

●瓦塚古墳出土盾持人埴輪

瓦塚古墳からは完形に近い形で盾持人埴輪が出土している（図 12 中央）。瓦塚古墳の南西隅角部付近の外堀から出土しており、中堤上隅角部に樹立していたと考えられる。瓦塚古墳の中堤上には埴輪列が存在したとされているが、埴輪列の最後尾から数 m 離れた箇所に樹立されていたと想定されている。円筒部は複数の突帯をもち、両側面の上下に 2 か所、径の異なる円形透孔が穿孔される。盾部は両側面に粘土板を貼付する形で表現する。盾の横幅は非常に短く、全体で縦長の長方形を呈す。盾の鱗部はヨコハケ、円筒部はタテハケ調整される。線刻や赤彩は確認されず、非常にシンプルな盾である。円筒部上部に接続する顔は大きく作られる。頭部の両側面に耳孔が大きく穿孔される。目と口は細長く切り込みが入れられ、鼻は高く作出する。頭部の大きさに比して顔のパーツは小さく、無表情である。頭頂部には二又に分かれる突起をもち、帽子状のものを被っている。

●將軍山古墳出土盾持人埴輪

將軍山古墳からも完形に近い形で盾持人埴輪が出土している（図 12 右）。出土位置は墳丘の西側、中堤造出し部（方形区画）の南側で、破片が密集した状態で発見された。左側の鱗部は欠損するが、頭部はほぼすべて残り、円筒部の残存状況も良好である。高さは 83.3cm と大型である。円筒部には 1 条突帯が巡っており、突帯の直上に盾部が取り付けられる。突帯の直下両側面には円形透孔が穿孔される。盾部は円筒部の両側面から鱗状に取りついており、1 枚の平面的な盾の表現ではない。盾部の正面には戟を貼り付けた痕跡があり、柄の一部が残存する。顔面は、円筒部に粘土板が貼り付けられ表現される。鼻が欠損する。目は長方形で口も直

・完形品は瓦塚古墳、将軍山古墳から出土。
 ・稲荷山古墳、天祥寺裏古墳からも盾持人埴輪と考えられる個体が出土。



稲荷山古墳出土
盾持人埴輪か



瓦塚古墳出土
盾持人埴輪



将軍山古墳出土
盾持人埴輪

図 12 埼玉古墳群出土の盾持人埴輪

線的に表現されており、無表情である。円筒部はタテハケ調整で盾の鱗部分はナナメハケ調整である。頭頂部は2又に分かれる帽子（笄帽）状のものを被っている（さきたま資料館編1997）。

埼玉古墳群内で発見された盾持人埴輪を確認すると、以下の点が共通する特徴として指摘できる。①出土位置が墳丘に伴わず、中堤に樹立されていた可能性が高い。②盾は1枚の粘土板から作られず両側面に鱗状に取り付けられる。張り出しがやや小さく、線刻や赤彩もされない。③顔は無表情であり、頭頂部は2又に分かれる帽子（笄帽）状のものが表現される。

奥の山古墳から出土した盾持人埴輪は盾の形状や表情など、埼玉古墳群内出土の他の個体と共通する特徴をもつ。頭部については、奥の山古墳の資料は一部欠損するが、笄帽状の頭部をもっていたと推定される。奥6の資料は笄帽の一部であるとも考えられる。盾の形状や目の切り込みなどは、年代的に先行する瓦塚古墳の個体と非常に似ている。樹立箇所については、中堤である可能性も捨てきれないが出土状況から外堀の外側であると想定される。出土位置が瓦塚古墳の個体と同じ南西隅部である点も興味深い。瓦塚古墳の中堤に並んでいたような埴輪列が奥の山古墳にも存在したかは不明であるが、埼玉古墳群において盾持人埴輪が中堤造出しや隅角部分などの要所に置かれていた点は指摘可能である。また近縁からは別個体の盾持人埴輪と考えられる破片（奥2・3・4）も出土しており、複数個体の樹立も想定される。埼玉古墳群の盾持人埴輪は、古墳の中でも限られた場所にしか樹立されなかったと考えられる。今後の発掘調査により出土例の増加が期待される。

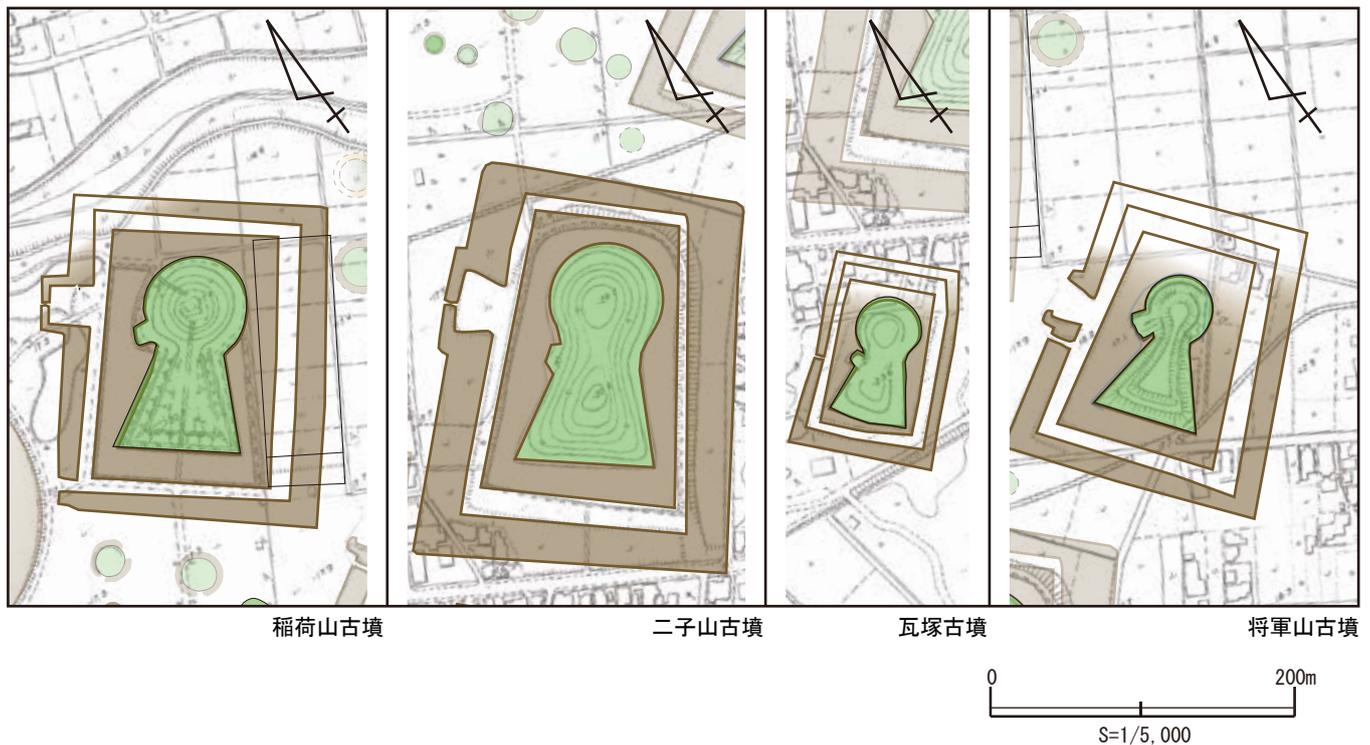


図 13 ブリッジ構造をもつ埼玉古墳群内の前方後円墳

5. まとめにかえて

平成 30 年度の調査は、奥の山古墳の外堀南西隅角部の検出を目的に、短期間、また狭小な範囲で実施された。結果的に、平成 19～21 年度の復元で示されたプランとは大きくずれる形で外堀が存在する点を確認できた。また出土遺物について、完形に近い形で出土した盾持人埴輪を中心に整理を行い、資料化することができた。しかしながら、取り組むべき課題も多く残されているため、一つ一つ整理し、これからの指針として書き留めておく。

一つ目は発掘によって明らかになった南西隅角中堤の形状についてである。発掘の結果が既整備部分と一致しない点は置くとして、この張出し部分が何を示すかについては十分な検討を行っていない。埼玉古墳群の稲荷山古墳の隅角には、ブリッジ状の施設をもつと報告されている(中山 2003)。他にも、中堤造出し部にブリッジをもつ古墳として、稲荷山古墳、二子山古墳、將軍山古墳などの例がある。瓦塚古墳は中堤に直接ブリッジをもつ(図 13)。ブリッジの機能については、祭祀行為が行われる場への通路や古墳築造作業用の通路等諸説あるが、付設された場所やブリッジの規模によっても性格は変わってくるであろう。そもそも奥の山古墳の南西隅の張り出しは外堀・中堤を完全に分断するものではないため、ブリッジとして論ずる際は注意が必要である。これがブリッジ状の施設の痕跡であるとするならば、その付近に盾持人埴輪が樹立されていた事実にも目を向けるべきである。

次に、発掘調査成果を踏まえた古墳の整備についてである。発掘によって把握できた、墳丘西側における外堀の位置と形状は、本調査において得られた最も重要な情報である。平成 30 年度の保存整備協議会では、調査結果を受け、成果を反映させる形での整備が望ましいとされた。既整備部分との齟齬があるためどうしても違和感が生じるが、来跡者に誤解を与えないような整備手法を考慮する必要がある。なお奥の山古墳の南西隅については、令和元年度より整

備を開始している。

最後に、発掘調査成果について概報を出す意義についてである。これまで埼玉古墳群では毎年のように発掘調査が実施され、多くの一次資料とともに図面、写真という形で記録されている。しかし時を経るごとに調査の記憶は失われ、調査の際に得た所見等は記録に残らない。また調査図面や写真も恒久的に残るものではないため、スキャンやトレース等でデジタル化していくことが望ましいと考える。当然、記録保存として将来にわたって残すことができるような方法は模索していくべきである。発掘調査を実施した後は概報という形で可能な限り速やかに報告を行い、調査成果が蓄積したところで本報告を行うというサイクルを構築すべきである。今後も未報告の発掘調査について、紙上で報告を行っていく予定である。

(注1) 昭和43年の調査においても美豆良の破片が出土している。

〈図版出典一覧〉

- 図1 (埼玉県立さきたま史跡の博物館 2019) を基に筆者作成
- 図2 (駒宮史郎他 1989) を一部改変
- 図3 (埼玉県立さきたま史跡の博物館編 2014) を一部改変
- 図4～7 調査図面を基に筆者作成
- 図8～11 筆者作成
- 図12 (埼玉県立さきたま史跡の博物館編 2014) を基に筆者作成
- 図13 (埼玉県立さきたま史跡の博物館 2019) を基に筆者作成

〈参考文献〉

- 岡本健一 2019 「行田市埼玉古墳群(奥の山古墳・二子山古墳)の調査」『第52回遺跡発掘調査報告発表要旨』埼玉考古学会
- 駒宮史郎他 1989 『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』 埼玉県教育委員会
- 埼玉県教育委員会 1980 『埼玉 稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会
- 埼玉県立さきたま史跡の博物館編 2014 『史跡埼玉古墳群 奥の山古墳発掘調査・保存整備事業報告書』 埼玉県教育委員会
- 埼玉県立さきたま史跡の博物館編 2018 『史跡埼玉古墳群 総括報告書I』 埼玉県教育委員会
- 埼玉県立さきたま史跡の博物館 2019 『ガイドブック さきたま』
- 埼玉県立さきたま資料館編 1997 『将軍山古墳《史跡埼玉古墳群整備事業報告書》一史跡等活用特別事業一 確認調査編・付編』 埼玉県教育委員会
- 白井久美子 1983 「小規模古墳の一類型について ―ブリッジ付円墳の検討―」『古代』75・76号 早稲田大学考古学会
- 高木豊三郎 1936 『史蹟埼玉』 埼玉村古墳群
- 中山浩彦 2003 「稲荷山古墳外堀の陸橋部について」『調査研究報告』第16号 埼玉県立さきたま資料館